

#### (4) 塩吹き臼

兄と舎弟がいたって。兄はどんどんどんて家の中まんにゃあだげんじょも、よぐよぐのけちん坊のしぶつたれなんだって。そして、ある時貰い者訪ねて来て、「泊めで貰いで」ったら、その兄は、それほどどんどんやってんのに、「泊めらんにゃ」ってゆうわけなんだと。それで舎弟の方はやっこすっこ食ってるありさまで、ろくな布団もねんだげんじょも、「俺家さやあべ」って、家さ連れでって、布団もねくれい位だから、着物も着ねで飲まず食わずに泊まって、そして明日の朝げまで泊めで、そしてわがの食わねで、そして食わせでやったって。

貰いものは褒美に何か置いてったんだと。

石臼のようなあんべい按配で、「米出ろ、金出ろ」って回わずどゆうど、なんでも出んだってゆうだナ。舎弟の方で何でもどんどんどん出るもんだから、今度こんどやっかんで、此頃ねえ物ねえ位に間に合って、どうしたんだかと思って、兄も欲深だから、縁の下に隠れて聞いていたんだって。そして舎弟のいね時盗んでって、今度船中で、「塩出ろ、塩出ろ」って回したら、なんぼでも塩出て盗み聞きしたんだから泊めっこ出来ねえで、船が沈みっきりになっちゃったと。

#### (5) 食わず女房

その人が堅けちいっちゅうだか吝けちいっちゅうだかわかんねげんじょも、飯を食わせんのが惜しいんだって。そんじょ、「飯を食わね女の人がいだから世話してやっぺ」って、そして世話してやったんだって。そして毎日見ると、毎日米がどっさと無くなってぐんだと。奇体だ、外の人は持ってぐわけはねんだから、どっで、そのおとつあまあきねいは商あきねいだあきねいったんだって。毎日背負いっこ商に出たあとで、あんまり米が減へんで様子見てたんだって、商に出たふりして二階屋さあがって、そして隠

れで見てたんだって。おとつあまが出てったから始まったんだと。大きな箆だして米いっばいざっくざっくといで、大っきハガマ（釜）さ焚いたんだと。そしてその飯まんまをどうすんだかと思って見でならば、握り始まったんだと。握っては頭さ入れ入れしたんだと。はて不思議だなど思って見てたんだって。そうゆうごとしてんだから米が減んだなど思って、そして、「こら、なにしてんだ」どどなったんだ。そして梯子もなにも外はずしちゃって、そしておとつあま降おちらんにゃくしっちゃまったって。そして鹽を持って来て、そして頭の上さ乗せたんだって。そして、「おとつあん、この上さ降おちらせ。この上さ乗かからし」って。鹽ひやあが入るやいなや、行っちゃったんだってそしたら、ハア、大変だ。これ、満足なものがんでね。何者が知んにゃど思って感かんづいたんだって。

ハア山奥さ入っちゃったんだつうがら。そして山奥にこういあんべいい按配に棚んべに木があったんだって。そごさ行ったらあの木さ掴まりましようと思って、そしてその木さ掴つかまつかさつかったんだって、掴つかまつかさつかたらそれど知らずに行っちゃったんだってゆうな。そのおとつあまが掴つかまつかさつかったところは広い菖蒲やじど連の谷地ば場ばだったんだって。そごさ隠かくちかくゃかくえかくたら、頭の上かが軽かくなかったんだかばい、これは逃げらかちかゃかどかなかって、大かっかきかなか大か蛇かがわあさわあさどやかって来かたかんだかって、そうかだかわかい、大か蛇かだもの、女かに化かけてたかんだかから。そして大か蛇かはあかきからかめかでかって、丁度おとつあまが家さ帰かって来かたかのが五月節句かだかったかんだかって、菖蒲の屋根かをか茸かくかのはそのわけかなんだかって。

#### (6) 花咲翁さん

お翁さんは山へ柴刈りに、お婆さんは川へ洗濯に。

そしたら、赤犬いっ仔いど白犬いっ仔い流いちいゃい来いたいんだいって。「白犬いっ仔いあいっ